

日本の

経済成長と宗教

財界人の人格主義と大乘仏教について

由井常彦
yui tsunehiko

●テーマとしての経済と宗教

「日本経済と宗教」という大きなテーマのもとで、小さなエッセイを書くことにしたい。明治日本の経済近代化と儒教道徳（「論語」と算盤^{そろばん}）を説いた洪沢栄一に代表される）については数多くの研究や文献があるが、それに反し、第二次大戦後の日本の奇跡と言われた「復興から高度成長と宗教」というテーマについての議論は、寡聞にしてこれを聞かない。戦後の経済発展は、企業家や経営者たちのあくなき営利追求の成果であるから、宗教とか理念とは無縁と考えられているのかもしれない。そう言えば最近でも、「市場原理」にそくした利益追求こそが、日本経済の再生の途であるかのような議論さえ堂々と言われている。

だが、そうだろうか。それでは、かのM・

ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の所説（禁欲的なプロテスタンティズムの宗教的な倫理規範こそ、近代西洋資本主義の精神的源泉とされる）は、空虚な学者のたわ言でしかないのだろうか。私は、日本の経済復興と成長（過去のものとなりつつあるが）は、かつての財界人に代表されるリーダー層の禁欲的な精神性、宗教的といえる信念・理念によって可能となった、と考えている。それは、二十世紀初期に大学教育、特に旧制高校に学んだ知識人エリートの道義心であり、究極的には宗教的な倫理意識であったと言えらると思う。

●学卒エリートの人格主義・理想主義

明治日本に誕生した近代企業を、二十世紀

になって大会社に成長させたのは、創業者家族（彼らの多くは財閥資本家にとどまった）よりもむしろ学卒の経営者たちであり、彼らは高学歴の知的エリートとして、財閥や大企業に就職し、専務・社長にまで昇進して、大正・昭和期に「財界」（経済界のトップ・グループ）を形成した人びとであった。

彼らは旧制高校や大学予科で、エリートたる条件として西洋哲学や東西の思想を学び、人格主義・理想主義の教養を身につけた。デカンショがそれを象徴している。彼らは科学知識ばかりでなく、理想主義的人格たることに、明治の先輩を超えた矜持^{きやうじ}を身につけたのである。

一高・東大生が集った内村鑑三の「白雨^{びやくう}会」は代表的な存在といえる。南原繁や矢内原忠雄らの学究ばかりでなく、ここには石坂泰三ら、のちの政財界のリーダーたちも数多く参加したのである。

●昭和初年の恐慌と財界人の試練

最初の財界人の団体は、一九一七（大正六）年設立の「日本工業倶楽部」であった（三井合名理事長の団琢磨^{だんたくま}が初代会長）。ここに参加した新しい世代の経営者たちは、ヒューマニストたちで、工業倶楽部の玄関に「鉦夫と織姫」の像を刻み、「労使協調」の日本の産業社会の未来に理想を託したのであった。

だが、彼らを待ち受けたのは、昭和初年の

大恐慌と政治的・社会的な不安の到来であった。伝統的な家族主義や温情主義の経営は、恐慌と国際競争の激化の前に維持すべくもなかった。規模の大小を問わず、労働者のストライキと雇用不安が全国化し、マスコミは「家族主義の挫折」と称した。財閥と大企業は、世論の批判の対象となり、団琢磨は、「三井のドル買い」の元凶として右翼テロの犠牲となり、三菱のリーダーの岩崎小弥太は神経を病み、住友家の当主は労働者に自邸を囲まれ、死期を早めた。

●西田哲学・大乘仏教と財界人

こうした戦前の日本の資本主義の危機に対し、対応を求められたのが、経営者、特にリーダー的財界人であり、彼らにこそ、資本主義の没落を歴史的必然と説くマルクス主義哲学に対抗する理論と実践が求められたのである。そして、彼らの「労使協調」「経営一体」観の拠って立つ理論的根拠は、この時期に成長した西田哲学であり、究極的には大乘仏教であった。

いわゆる京都学派の西田哲学は、人格主義・理想主義を標榜しつつも、西洋の二元論を排し、東洋的一元論を根拠とするところに特徴があった。その哲学は、キリスト教（神と人間の対立の二元論）よりも、西田幾多郎の「矛盾の自己同一」、鈴木大拙の「主客一体」「相即相入」に帰結するものであった。そうした対

立よりも調和・矛盾よりも統合を強調する哲学は、周知のように日本の国家観・社会観に大きな影響をもたらしたが、同時に、大企業の経営観（経営一体）にとってきわめて親和的であった。

かくて、一九三〇年代の知的エリート出身の経営リーダーたちは、経営の精神を宗教・修養に求めるようになった。工業倶楽部のリーダー格の中島久万吉は禅に没頭し、戦時中に「素修会」を組織し、後継者たちに『碧巖録』を講ずるに至ったことは、禅が、彼の経営観にとつてもきわめて親和的であったからである。大学での禅会の普及と共に、それほど不思議はないのである。

●戦後財界人と宗教

敗戦後、工業倶楽部に集った宮島清次郎、石川一郎、石坂泰三、諸井貫一ら、パージを免れた財界人（いずれも一九一〇年代に東大卒）たちが、日本の再生に究極的に必要なものを論じた結果は、「エネルギーと宗教」であったという。彼ら四人は、戦後の経済団体のリーダーとなるが、ここでは宮島（日清紡績）と石川（日産化学）の二人を取り上げてみよう。

宮島清次郎は、若い時から徹底した厳格主義者で、労働者と生活を共にする式の「労使一体」の実践者として知られた。東西の思想・宗教を研究したあげく、大乘仏教の信奉者と

なった。吉田茂のクラスメートかつ親友で、二十年間、理事長を務めた工業倶楽部は、「財界の奥の院」と称され、経営者たちに畏敬された。叙勲を辞退し、生涯、禁欲主義者であり通した。

石川一郎は、東大工学部助教授の経歴の持ち主で、坐禅に抵抗感をもっていたが、ある日、本郷通り（文京区）にある浄土真宗の寺院で、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界」〔歎異抄〕を耳にして、翻然、衆生の一人として覚るところがあり、聞法をもって常識人の宗教生活とした。彼は、最大の経済団体たる「経団連」（経済団体連合会）の初代会長に就任すると、「至誠一貫」を信念とした。石川の経団連会長は戦後復興の十年間に及んだが、彼のリーダーシップのもとでスキャンダルが起こっていないことは、特筆すべきことである。

宗教的禁欲主義者であった財界のリーダーは、その後、一九七〇年代の土光敏夫（日産宗）まで続いた。八〇年代以降、日本の資本主義が世界的発展をとげる他方、強烈な理念の持ち主が財界を去ると、バブル経済がおとずれたことは、経済と宗教が無縁でないことを象徴している。

（ゆい つねひこ）文京学院大学教授
著書に「清廉の経営―都鄙問答と現代―」日本経済新聞社